

日中における 2 型糖尿病患者の治療効果と QOL を高める 『ファミリーパートナーシップ』看護援助システムの構築

研究者氏名	講師 カルデナス 暁東
日本所属機関	大阪医科大学看護学部
共同研究者名	田中 克子, 花房 俊昭
中国研究者氏名	看護部長 石 貞仙
中国所属機関	山西省人民病院看護部

要 旨

現在、日本と中国を含めた西太平洋地区において 2 型糖尿病患者が急増している。今後、日本と中国の患者とその家族の治療効果と自己管理能力、QOL を高めるため、今回は 2 型糖尿病患者の『ファミリーパートナーシップ』看護援助システムを開発し、その有効性を評価する目的で、研究を行った。日中両施設において、成人期の 2 型糖尿病患者とその家族を対象として、多職種による開催した「糖尿病サロン」に参加し、グループ講義と個別指導を受けてもらった。サロン日以外は研究者らによるメールで個別にフォローを行った。結果としては、食事・運動・薬物療法に伴う自己管理に関する知識・技術が高まり、血糖値が安定している傾向がみられた。また、患者とその家族の治療に対する負担感の軽減と QOL の向上傾向もみられた。糖尿病患者の療養生活においては、患者と家族が互いに影響し合う関係であるため、両者に同時に看護援助を行うことが重要である。開発した『ファミリーパートナーシップ』看護援助システムの有効性が期待できると考える。

Key Words

緒 言

2013 年に国際糖尿病連合 (International Diabetes Federation : IDF) は、ライフスタイルの変化や遺伝子の影響等により (中村, 2009)、日本と中国を含めた西太平洋地区の糖尿病有病者数は 1 億 3,800 万人で、世界で最も糖尿病人口が多い地域であると発表した (IDF, 2013)。そのため、西太平洋地区の国々にとって糖尿病の予防・治療に向けた取り組みは喫緊の課題となっている。

近年、経済・文化・医療等の分野において、グローバル化が進み、各国間での糖尿病の予防・治療・看護に関連した知識や技術の交流と共有が可能となる。我々は 2011 年から、山西省太原市にある山西医科大学附属病院や山西省人民病院との学術交流・共同研究を始めた。これまでの学術交流・共同研究では、2 型糖尿病患者とその家族が抱えている課題においては、国の事情による異なる点があるが、共通点も見られた。そのため、両国の患者とその家族の自己管理能力と QOL を高める看護援助プログラムを開発し、その有効性を検証していくことには意義があると考えられる。

2 型糖尿病患者には、良好な血糖を維持するためのセルフモニタリング、食事・運動・薬物療法に関する自己管理行動が必要不可欠である。そのため、長期にわたる自己管理行動をサポートするための様々なアプローチが行われている。と同時に、患者とその家族のライフスタイルと生活の質 (Quality of Life、以下 QOL と略す) への影響が大きいともいえる。

本研究に参加することによって、長期戦である治療に伴う食事・運動自己管理によって生じる患者とその家族の負担感が軽減できる。患者と家族の食事・運動自己管理能力との治療効果を高め、患者とその家

族の QOL を高めることが期待できる。

本研究の目的は、2 型糖尿病患者の『ファミリーパートナーシップ』看護援助システムを開発し、その有効性を評価することであった。

研究対象と方法

1. 対象：

（中国）山西省人民病院内分泌内科、（日本）大阪医科大学附属病院糖尿病・内分泌内科外来に通院しているまたは糖尿病センターに入院している 20～65 歳の 2 型糖尿病患者とその家族、10 組程度である。対象者のリクルートは主治医と病棟看護師と相談した上で決定し、対象者に依頼を行っている。

対象者である患者の選定基準は下記の通りとなる。

- 1) 2 型糖尿病と診断され 6 か月以上経過している
- 2) 20～65 歳の成人である
- 3) 大血管系合併症・併発症がない
- 4) 食事療法は糖尿病食のみである

2. 方法

1) 介入：

「糖尿病サロン」（介入）を 2 回（1 回/2 か月）開催し、内容には、糖尿病の食事・運動自己管理に必要な知識・スキル、ちょっとした工夫および療養生活の中のこころの持ち方といったテーマのグループ講座、患者同士、家族同士の意見交流および医療従事者による個別指導を行っている。サロンが開催しない期間は、研究者による患者とその家族への電話もしくはメールを用いた個別フォローを行っている。研究期間中は、患者とその家族に『糖尿病ライフ』手帳への記入、スズケン社製の「ライフコーダー」を用いた日常生活の中の身体活動量、ロシュ・ダイアグノスティクス株式会社製「アキュチェック ST メーター」を用いた日々の血糖値を測定してもらっている。

2) データの収集：

質問紙一式の回答と定期受診時の血液検査値、『糖尿病ライフ』手帳の記録内容、「ライフコーダー」による測定した身体活動量、ロシュ・ダイアグノスティクス株式会社製「アキュチェック ST メーター」（自己血糖測定器を持っていない患者には研究者が準備し渡す）を用いた測定した血糖値は、本研究の分析データとなる。

患者を対象とした質問紙には、患者の基本属性・疾患・治療・日常生活習慣に関する『基本情報』・『家族尺度』・『食事・運動療法に関する自己効力感尺度』・『自己管理行動ステージ評価尺度』・『糖尿病自己管理についての意思決定バランス』・『SF8』・『POMS』が含まれる。

家族を対象とした質問紙には、『自己管理参加の行動ステージ評価尺度』・『糖尿病自己管理参加についての意思決定バランス』・『SF8』・『POMS』が含まれる。

定期受診時の検査値は、HbA1c、BS、血圧、身長、体重、HDL-コレステロール値、LDL-コレステロール値、中性脂肪、Ga 等が含まれる。

『糖尿病ライフ』手帳には、日々の血糖値、治療に伴う食事・運動自己管理行動、家族の食事・運動自己管理への参加度、患者と家族の気持ち・思いに関する内容等が含まれる。

3) データの分析：各種尺度得点、検査値の変化は、個人が特定できないよう SPSS17.0J for Windows を用いて、Mann-Whitney U 検定を行う。

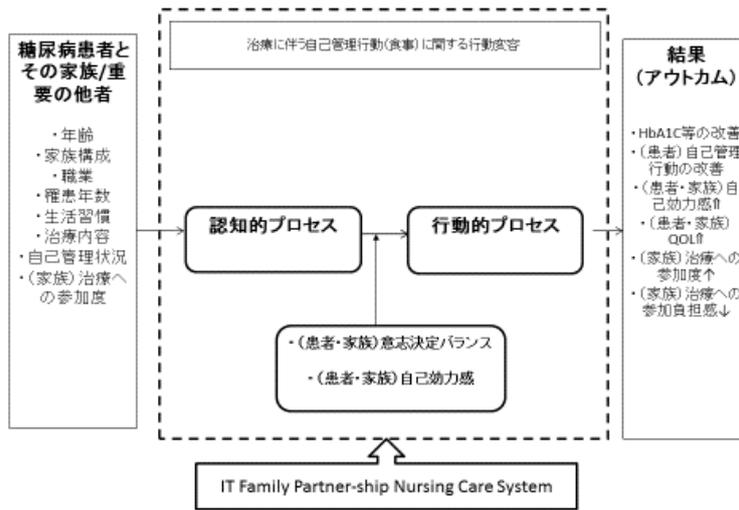


図 多理論統合モデルに基づいた研究枠組み

糖尿病サロンに参加しませんか?

10,000円相当の自己血糖測定キットをプレゼント!

～研究ご協力をお願い～

研究の概要
医療者とご家族が、ともに患者さまを支援していく、という新しい援助プログラムの効果を評価します。

ひとりでも多くの患者さまが、良好な血糖コントロールを維持し、自分らしく生き生きとした健康生活を送ることが私達の願いです!

ご家族
患者さま
医師
看護師

募集対象者
●2型糖尿病と診断され6か月以上、かつ20～65歳の患者さまとご家族

お願いすること

- 「楽しく糖尿病と付き合うサロン」(合計2回)への参加
- アンケート(合計3回)の記入
- 4か月間、食事・運動療法についての記録
血糖値自己測定、万歩計による身体活動量の測定、手帳の記録

お申込み方法
糖尿病代謝・内分泌内科の主治医にお伝えください。

研究グループ
大阪医科大学看護学部 慢性期成人看護学領域
大阪医科大学内科学Ⅰ 糖尿病代謝・内分泌内科
研究代表者：看護学部慢性期成人看護学領域 講師 カルデナス暁東

大阪医科大学

図 研究対象者リクルート時のチラシ

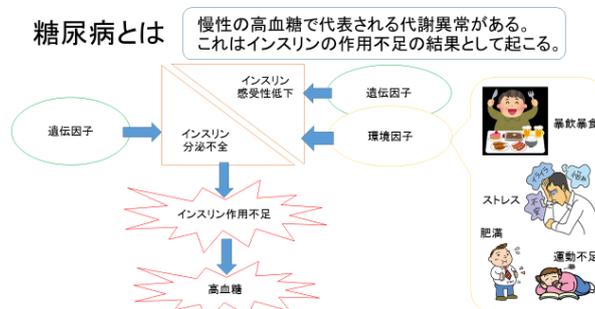


図 糖尿病サロン資料抜粋

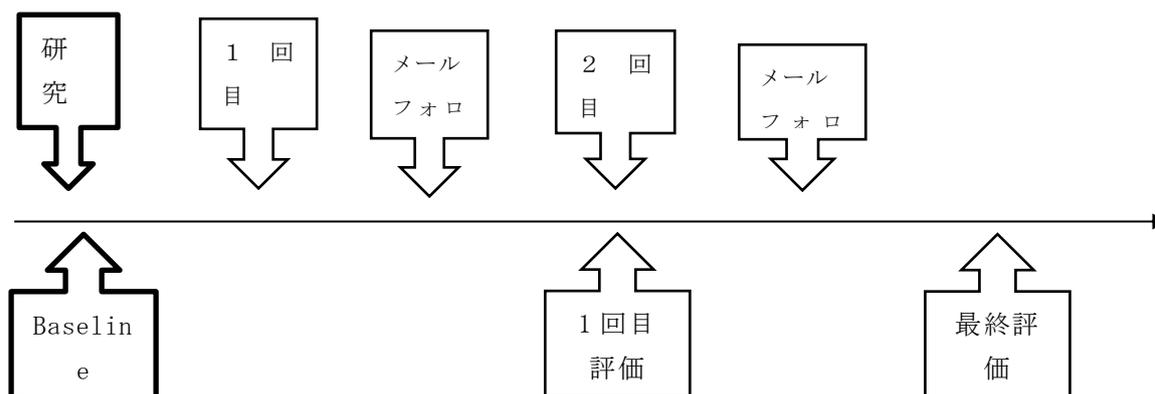


図 研究プロトコール

結果

現在、中国側研究施設では、10組のうち5組の患者とその家族が2回目の介入が終了し、他の5組は1回目の介入が終了した。日本側研究施設では、6組のうち3組の患者とその家族が2回目の介入が終了し、他の3組は1回目の介入が終了した。

プログラム全体は終了していないため、統計分析を行っていないが、患者との話し合った内容を医師と共有することで、今後の治療方針（栄養指導も含む）にも参考となり、患者の状況に応じて栄養指導を行った。その結果、患者のHbA1c値と日々の血糖値が安定している傾向がみられた。また、家族の治療への参加度が高くなり、本人とその家族のQOL尺度（SF8）スコアの向上もみられている。

考察

糖尿病患者は、日々の療養生活においてソーシャルサポートとして家族の気持ちや家族環境を含んだ様々な家族支援を受けており、それは患者が血糖コントロールを行うための自己管理行動やセルフケア行動に影響を与えている。その一方、患者の療養生活をサポートするにあたって、家族にも負担感やストレスが生じることもある。

今回は、最終的に統計分析を行っていないが、対象患者の血糖値の改善、患者とその家族のQOLの向上、療養生活に対する負担感の軽減傾向がみられているため、本研究の看護援助の有効性が期待できると考える。

参考文献

1. 山口曜子（2010）：2型糖尿病をもつ有職患者への行動意思を促進するクリニックでの糖尿病教育プログラム，日本看護研究学会雑誌，33（5），65-74.
2. 村上美華，梅本彰子，花田妙子（2009）：糖尿病患者の自己管理を促進および阻害する要因，日本看護研究学会雑誌，32（4），29-38.

作成日：2015年 3月13日